



人権作文に学ぶ

生物的な性差とは別に、「男らしき・女らしき」のように、社会や文化の中で作られた性別に対する考え方のことをジェンダーといいます。

例えば、「男の子は青、女の子はピンク」、「単身赴任をするのは男性」「家事や育児をするのは女性」といったように、なんとなく性別によって固定化されたイメージを抱いてしまうことがないでしょうか。こうした性別による役割分担意識の押し付けが他者にも自分にも生きづらさを抱かせてしまうことがあるため注意が必要です。

今回は幸喜聖那さん（執筆当時11上陽北小学園8年生）の人権作文を通して、性別にかかわらず、だれもが生きやすい社会のために大切なことについて、一緒に考えてみましょう。

女子力の固定観念

みなさんは、女子力が高いと言われたら何を思い浮かべますか。気遣いができる、服装や持っているものが女性らしい、そういうイメージを思い浮かべる人は多いのではないかと思います。女子力という言葉は初めて耳にしたとき、私は自然なほめ言葉だと感じましたが、インターネットなどで詳しく調べてみると、ジェンダー的に不平等で不適切な言葉であることがわかってきました。

そもそも女子力という言葉はどうやって生まれてきたのでしょうか。あるサイトによる



と、女子力は二〇〇九年の流行語大賞にノミネートされたのが流行するきっかけだったそうです。当時は女子力をほめ言葉だと感じる人がほとんどで、輝いている女性を持つ力、自らの生き方や自身の存在を示す力というように、今とは少し意味合いが違っていたようです。しかし、残念ながら現在の女子力

という言葉は女っぽいこと、女らしさがあることを象徴する言葉として使われることが多いようです。



ジェンダーへの関心が高まっている今、女子力という言葉は、女子は女子らしくいनाさいという価値観を押しつけられているようにも捉えられます。また、男子に対して使えば、家庭力があつて素晴らしいとも、男子のくせに女々しいとも、れ、ほめているのか、けなしているのか、解釈が非常にあいまいで、受け取り方がとても難しく感じてしまいます。女子力以外にも性差別につながる危険度があると思われる言葉として、育児をする男性につけられる「イクメン」、理系の女性につけられる「リケジョ」等が挙げられるでしょう。これらの言葉に共通するのは、男性のすべきこ

とを女性がしている、といった価値観が背景にあるのではないかと思います。しかし、大切なのは私たちが性別に捉われずに、もっと自分らしく生きることなのではないでしょうか。そのような社会を実現するためには、私たちがもっとジェンダーについて学び、考えることが必要だと思います。それが広く浸透していけば女子力という言葉が誰かを傷つけることは少なくなっていくのではないかと私は思います。

これからは、ジェンダーバイアスがなく、一人一人が固定観念に捉われずに、自分や他の誰かをその枠にはめ込んではいないかに気をつけながら自分らしく生きていける社会を目指す一人でありたいと思います。

普段何気なく使っている言葉を見つめなおし、性別による偏った見方、考え方、自分の中にある「当たり前」を疑ってみることが、一人一人の個性と能力を発揮できる社会の実現へとつながるのではないのでしょうか。